

おてら



日蓮宗 本山 東身延

藻原寺

この度の東日本大震災に際しまして、犠牲になられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

この震災で、被災地に限らず、ガソリン不足やスーパーから食べ物が無くなる事態になりました。計画停電により皆様も不便に感じた事と思います。停電で真っ暗になった街を眺めますと、月明かりに照らされ、人気も音もなく静か過ぎて「恐怖」を感じました。しかし、これが自

然の姿（普通の夜）なのではないでしょうか。たしかに日本の高度成長は、電気の安定供給があつて成り立っていました。電気のお陰で一昔前では考えられない

事が次々と現実と成り、便利で何不自由なく暮らしていけると思つていました。その反面、暗くなり体を休めなければならぬ時間も、昼間と同じように生活できるのです。私たちは知らぬ間に電気に支配されて、自然の流れに反し、異常な生活を送つていたのではないかと思います。

彼岸経廻りでこんな話を聞きました。「家には中

学生の子供がいるけど、普段は自分の部屋でゲームばかり。でも今回の停電で、コタツにみんなで集まり、テレビも点かないからいろんな話が出来て、家族がまとまった気がする」と、計画停電の時の様子を話されました。震災により、救援や支援など、「自分にも何かできないか」と日本国民が同じ方向を向いた事で、家族の意識も一つになる事ができた

支え合う人間の力

復興に向けて



のではないのでしょうか。震災後に体験した事は、戦争も戦後の復興も体験していない世代の人たちにとつても、命の繋がりを考える大きな転機になった事は間違いないと思います。電気に限ら

ず、在つて当たり前、居て当たり前など、どこにもそんな保証はないのです。「ありがとう」とは、有る事が「難しい」と書きます。今まで普通と感じてきた事も、実は誰かの支えがあつて成立していただけなのです。この経験を今後の人生に活かして行く事が、犠牲になつた方々の供養に繋がります。日本の新しい復興に繋がるのではないのでしょうか。

未曾有みぞう

「未曾有」と書いて「みぞう」と読みます。この「未曾有」は、インド伝来の言葉で、その原語は、*adbhuta* (アドブタ) 「びっくりした」という意味です。

ところが、お経を翻訳する中国の人が *pu* (プー) 「有る」に強い否定句をつけた訳語としてしまったので、「未だ嘗て有らざる」＝「未曾有」と考えすぎて漢訳してしまったようです。

さて、お経『妙法蓮華經』の中には、「未曾有なることを得て、歡喜し合掌して」「衆生心喜んで未曾有なることを得」「一切未曾有の法を成就せり」「甚だ大いに歡喜して未曾有なることを得たり」と未曾有・未曾有法など五十ヶ所ほど出てきます。

いかがでしょうか。仏典においては、これまでになかったこと、非常に珍しいこと、世にも不思議なこと、奇跡、希有などの意として用いられている。

とに気づきませんか。

つまり、「今まで経験しなかったほど素晴らしいこと」と、ほめたたえているのです。

いつのまにか現代の私たちは、「未曾有の大地震」「未曾有の経済危機」「未曾有の大事故」「未曾有の大雨」などと悲惨で悪い出来事や災害などが起こった時に使う日本語としてしまったようです。

ほとけさまがこの世にお出ましになられ、素晴らしい教法をお説きになられたこと。

日蓮大聖人が、いままでになかった最高・最上・最尊のお題目・南無妙法蓮華經を唱え、ほとけに成ること、成れることをお示しくくださったこと。すべて「未曾有」です。

私たち、一秒先の未来「未だ嘗て有ることがなかった」この上ない佛身を成就させるために精進し、自分自身に「びっくり！」したいものです。



心の修養 六波羅蜜

はらみつ



春と秋には、昼と夜の時間がちょうど半分になる時期があります。それがお彼岸のお中日（春分の日・秋分の日）です。悩みや迷いの多い現実世界を

「此岸（しがん）」といい、苦しみのない究りの境地を「彼岸」といいます。お釈迦様は、この彼岸に到達するために六波羅蜜の修行を教えました。仏教には中道（ちゆうだう）という教えがあります。中道とは、どちらにも偏らずに原因などを総合した見方や考えのことです。このお彼岸の時期に、彼岸と此岸がちょうど半分と考え、中道の教えを合わせて六波羅蜜の修行をしました。「六波羅蜜」とはやさしくいえば「六つの行い」ということです。六つとは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧のことです。

一、「布施」は、ほどこしです。物だけではなく行動で施す事も大事です。人に親切にする事などです。

一、「持戒」は、定まりを守る、約束を守る、ということことです。家庭の中で、あるいは社会の中で、

定まりはたくさんあります。すべてを守ることは無理だと思ふ方は、これだけは守っていいこう、実行しようとして自分で定まりを作ってみるのもいいでしょう。

一、「忍辱」は、辱めをくつとこらえて忍ぶ心を養う。少しくらいの事で腹を立てない事です。

一、「精進」は、何事にも一生懸命に精を出して務める。怠け心は起きやすいものですが精進は努力が必要です。

一、「禪定」は、ご仏壇の前で静かに座って、自らの跡を振り返り反省すること。未来に向かってしっかりと生きていくことを心に誓う事です。

一、「智慧」は、文殊菩薩のような、広く大きいすべてを生かす智慧です。間違つた方向へ歩んでいかないためによく考え判断する智慧です。

以上の六つの行いを六波羅蜜といいます。お彼岸の法要に参列することも、お墓参りも、立派な六波羅蜜の修行をされているのと同じことなのです。お彼岸の一週間だけではなく、日々の生活のあらゆる場面で慈悲の行いを心がけて過ごす事が大切なのです。ご先祖に感謝し、お彼岸を有意義に過ごすことを心がけましょう。